

〔書評〕

木股知史著 『画文共鳴』——『みだれ髪』から『月に吠える』へ』

河野 有時

かつて木股知史氏は「ジャンルを越境する小さな旅に出発」したことがある。絵画、映画、マンガ、文学の垣根を取り払い、それらをイメージ表現として横断した旅は「人間の表現行為を包括してとらえる」(『イメージの図像学』一九九二・一一、白地社) ことによつて進められた歩みであつた。以前にも、氏は『イメージ』の近代日本文学誌(一九八八・五、双文社)において、近代文学の表現に近づこうと降りそそぐイメージの雨のなかを歩いている。言語中心主義という教室の窓から飛び出したこれらの旅では、二つの地点が直線的に結ばれてはおらず、大通りから裏路地までが多様に入り組んでネットワークを構成し、あちこちで意外な発見に出くわすことができる。そういう旅行家が今度は「イメージと文学が響きあつて作り出す表現世界」に分け入つていこうというのであるから、その行程が魅力的でないはずがない。ここに未踏の分野が切り開かれ、新たな道標が打ち据えられることは疑いを入れないところであらう。

イメージについて論じようとするとき、画像のような視覚的表

現は言語表現よりずっとお手軽なものであると考えるむきもあるようだ。逆に、それに異を唱えることに腐心するあまり言語表現の不備をあげつらう類の論もなくはない。しかし、木股氏は視覚的表現と言語表現のどちらかでなければならぬという二者択一的な問いをもつてせず、「イメージと文学の共鳴の試みが表現史にどのように展開したかを探ろう」と、二つの表現の交錯から生み出された世界の豊かさへと読者を導く。「画文共鳴」という書名は本書の、そして木股氏のこれまでの来し方を鮮明に映し出しているのである。

目次によつて内容の概略を示せば、

はじめに——画文が共鳴するとき

第I部「明星」という美術館

第一章 「明星」と美術(1 文学と美術 2 西洋化とナシ

ヨナリテイ 3 雑誌メディアと美術)

第二章 表紙の女神たち(1 一条成美と藤島武二 2 『文

壇照魔鏡』事件 3 表紙の女性是谁か 4 誌名

「明星」の意味 5 その後の女神たち

第三章

『みだれ髪』の画像世界（1 三六判という判型

2 先例としての『無弦弓』『迦具土』 3 『みだれ

髪』の表紙画 4 『みだれ髪』の挿画 5 絵画的

発想 6 『みだれ髪』以後 『小扇』『毒草』

第四章

「明星」と版の表現（1 木版の探求 2 石版と色

彩革命 3 木版の可能性 4 伊上凡骨と創作版画）

第五章

象徴主義再考（1 象徴主義の領域 2 上田敏の象

徴主義理解 3 未知なる内面 4 絵画と象徴主義）

第六章

蒲原有明の試み（1 ロセッティと蒲原有明 2 藤

島武二「天平の面影」 3 蒲原有明と青木繁 4

散文詩への転換 5 有明とホイットラー 6 内面

の絵画へ）

第七部

詩画集への道

第二章 画家詩人竹久夢二（1 コマ絵という空間 2 「夢

二画集 春の巻」 3 夢二と恩地孝四郎 4 小川

芋銭「草汁漫画」と小杉未醒「漫画一年」 5 諷

刺と抒情）

第八章

田中恭吉の試み（1 文学と美術と 2 自己の表現）

詩画集としての『月に吠える』（1 詩画集 2 口絵

とその起源 3 挿画の世界 4 不識の美しい人生

の共歓 5 植物幻想 6 草木姦淫 7 冬虫夏草

8 垂直と循環 9 恩地孝四郎の挿画 10 再版『月に吠える』

あとがき

からなり、「初出一覧」「図版一覧」「索引」が付されている。

第1部は「明星」という美術館。ここでは美術館になぞらえることができるほど美術を重視した「明星」が、「メディアを含めた文学表現のシステム全体の西洋化の規範」としてそれを位置づけていたことが明らかにされるとともに、その具体的な様相が浮き彫りにされる。

まずは「明星」の表紙画が取り上げられるが、初期「明星」の表紙画を描いた一条成美、藤島武二の活躍から画の表現するところまで随所で重要な指摘がなされている。思うに、知り得たことをいちいち声高に語るといふ行き方は木股氏の旅の流儀ではないのだろう。囊中の貴重な知見もさりげなく語られているが、掲げられた画に対する論述はきわめて説得的で、どのような指摘もここに至るまでの氏の長い旅路を思わせるものばかりだ。

続く「みだれ髪」の画像世界」では、「みだれ髪」という書物の三六変形判という判型や装幀、表紙画から挿画などのイメージ的表現の全体がどのように表現に作用し、相互に関係しているかが捉えられている。「みだれ髪」という書物を通して画像世界が広がりを帯びて開かれていくことが述べられているのだが、形態にせよ表紙画にせよ挿画にせよ、それらが本文の表現に奉仕するためにあるのではなく、相互に関連しあって歌集の世界を紡ぎだ

していることが見事に例証されている。「4『みだれ髪』の挿画」においては「百合をささげ持つ女性の挿画のイメージ」が「みだれ髪」の「白百合」の章よりも「百合の歌を得意とした登美子のイメージを表現している」と指摘されているが、「みだれ髪」や「恋衣」中の「白百合」の章だけではなく、雑誌「白百合」の画像世界をも補助線として得ることができれば、「明星」のそれとの対比も通してより複層的な世界が見出されるように思われた。ただ、本書は総括的な性質のものではないから、あれもこれもと言うのは怠慢な読者の繰り言ではあろう。

第Ⅰ部の最後には木版や石版という版の問題が取り上げられるが、とにかく学ぶことが多い。木版と石版、その表現性への論述を読みすすめるほどに実物への興味をかき立てられる。実物はどうのような色でどのくらいの大きさなのか。ぜひそれらを確認しながら味読していただきたい。

第Ⅱ部は「イメージと象徴主義」である。前段の第五章では近代日本における象徴主義の意義が捉え返される。近代日本におけるそれは写真によらない暗示という方法であったととりあえず言うことができるだろう。しかし、象徴主義を狭く日本近代詩の問題と限定せずに考えるなら、内的世界の直接的な表現という点に象徴主義の本質を見出す系譜を浮かび上がらせることができるというわけだ。木股氏はそれを辿りながら、後段の第六章において「詩画の共鳴に最も意識的な詩人の一人」である蒲原有明は、絵画に表現されたイメージを言語で後追いするところにとどまら

ず、夢や幻想をそのまま記述する散文詩の世界に進み出たと指摘する。氏はさらに、有明の散文詩への転換にはホイットスラーが深くかわつていたことを明らかにして、有明が「イメージを内在化する意識の絵画としての詩を志向した」ことを看破した。ただ、読者にとつては第Ⅱ部で述べられるような「象徴」をめぐる様々な問題を一度に理解するのはなかなか骨の折れることであろう。これも木股氏のお仕事ではあるが、「近代日本の象徴主義」(二〇〇四・三、おうふう)が第Ⅱ部の理解をより具体的なものとすることを申し添えておきたい。

第Ⅲ部の「詩画集への道」では、「恩地孝四郎、田中恭吉、萩原朔太郎の三人の共同作業」としての詩画集「月に吠える」が「イメージによる表現と文学表現がそれぞれの特性を生かしつつ微妙に交錯しながら、多義的な豊饒を生み出している」と位置づけられている。一般に口語自由詩の達成と評価されている「月に吠える」が、詩と画が交流した書物でもあるという指摘は示唆に富み、切り開かれた新たな表現世界に迫る提言は傾聴に値するだろう。

また、第Ⅲ部では「月に吠える」が実現されるまでの詩と画の共鳴も詳述されている。取り上げられたのは恩地孝四郎や田中恭吉に影響を与えた竹久夢二であるが、夢二における諷刺的、戯画的な手法と「何げない日常生活から、印象的な一瞬を取り出す」手法との関係は、その関係性自体が、例えばへなぶりと短歌のような、歌の所在をめぐる問題と共鳴しているように思われて興味

深かった。

本書を読み終えた多くの人は日本近代文学史に奥行きが与えられたかのように感じるかもしれない。しかしながら、このようなお仕事をイメージと文学の関連から日本近代文学史の一部が再考されたと言うだけではもの足りないように感じられる。本書が照らし出した表現世界は多様な表現が相互に行き交う表現史の上で吟味されるべきもののように思われるからだ。かかる表現史の場では、文学と絵画だけではなく音楽や建築、演劇なども協働しているだろうが、それらが問いかけるのは心と表現のつながりという人間の本质にかかわる問題にはかならない。本書が導いた画文共鳴する豊かな世界は人間の心と表現の共鳴ということを思わせるのである。

（こののありとき 東京都立産業技術高等専門学校）